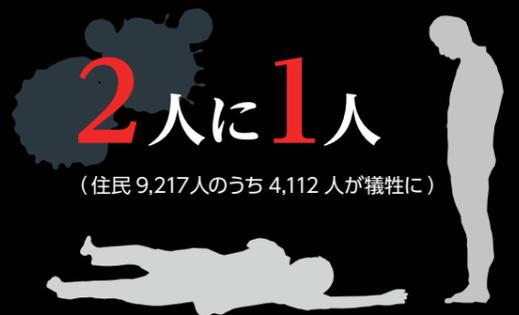


前田高地とは



現在の浦添城跡を含む、前田集落の北側に広がる標高120mの高地。この高地の断崖には、巨石「為朝岩」(米軍名ニードルロック)がそびえ立っている。日本軍はここからアメリカ軍の動きを監視し、反対にアメリカ軍も為朝岩を目印に前線を進めて来た。

犠牲になった浦添の住民



現在の前田小学校付近。前田高地を奪取し、首里へ前進する米兵。日本兵による「肉弾特攻」を受け、ひっくり返った大きな戦車が浦添のいたるところにあった。(写真提供：沖縄県立公文書館)

平和特集

72年の時をこえ

なぜ、私はここにいるんだろう。

おじいちゃんが戦争で亡くなっていたら。

おばあちゃんの妹が生きていたら親戚もいっぱいいたかな。

サンエー経塚シティの駐車場から見た前田高地

かつて浦添村だった頃。

「トゥントウンテン」と家々からは三線の音色が聞こえ、野山では子どもたちの明るい声が響き渡る。戦前の浦添村前田はそんな光景が当たり前のよう広がっていました。家々がかやぶき屋根に所々に赤瓦屋根の家が存在。十五夜の日には綱引きをし、夜は特設舞台で村芝居や組踊、前田棒の演舞を楽しむというように、前田は平和そのものでした。

しかしながら、その光景は1944年頃沖繩に日本兵が入ってきてから一変し、後に激戦地だったと語られるように戦争という渦の中に巻き込まれていくのでした。

激戦地だった浦添

1945年4月1日、北谷町から読谷村にかけての沿岸は、辺り一面米軍の艦船で埋め尽くされ、米軍は圧倒的な兵力を携えて上陸し、日本軍司令部のある首里攻略に向けて進軍しました。

日本軍は、宜野湾市の嘉数高地と浦添前田高地(浦添グスク一帯)に陣地壕を構えるなど防衛線を張り、侵攻してくる米軍を迎え撃ちました。

特に前田高地は、高いところで140mの高さがあり、東西南北の方向を見渡すことができる場所であったため、日本軍にとっては軍司令部のあった首里の防衛線として重要な場所とされました。

また米軍にとっても、眼前にそびえる絶壁の前田高地(米軍呼称「ハクソー・リッジ」)のこぎりで切ったような断崖を制することが、首里を攻略し、日本本土への進攻の第一歩として位置づけられ、頂上における日米両軍の激しい攻防戦は12日間にも渡り繰り返されました。

地上では米軍の戦車や装甲車が進攻し、おびただしい数の銃弾が飛び交い、壕には手榴弾が投げ込まれました。空からは「鉄の暴風」と表現されるほどの凄まじい艦砲射撃と爆弾投下が繰り返され、「前田高地の戦い」では両軍のみならず多くの住民もその犠牲となりました。

熾烈を極めた戦いは「ありったけの地獄を一つにまとめた」と言われるほどで、沖縄戦最大の激戦地となったのでした。